
Muv_Luv **本土防衛戦～九州の風**

mitsuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Muv | Luv 本土防衛戦〜九州の風

【Nコード】

N4295X

【作者名】

mitsuki

【あらすじ】

Beings of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race (人類に敵対的な地球外起源種)
通称BETA。それが地球に到着してから数十年続く人類の生存闘争『BETA大戦』。苛烈なる戦いの歴史の中で起こった、小さな物語達……そのうちのひとつ。

台風の中、本土防衛のために動き出すある衛士。彼にもまた、故郷があり過去があった。

・小説投稿サイト「arcadia」様にも同内容の物を投稿させていただきます。

（そちらでのタイトルは『**短編・中編**【戦場の片隅で……】です）

前編（前書き）

age様から発売されている『マブラヴ オルタネイティヴ（Muv-Luv Alternative）』の二次創作です。

・マブラヴオルタネイティヴの設定については、独自の解釈を優先しております

・オリキャラ登場

・一部過激な表現があります

・小説投稿サイト「arcadia」様にも同内容の物を投稿させていただきます。

（そちらでのタイトルは『【短編・中編】戦場の片隅で……』です）

前編

「総員、手を止めずに聞け！ 暴風雨下での戦闘においては、今までの訓練常識はほとんど通用しない！」

三川^{みかわいさお}勇雄帝国陸軍少尉は、搭乗した戦術機の管制ユニット内で計器をチェックしつつ、ヘッドセットから漏れてくる連隊長の声に意識の一部を向ける。

「雨の為に視界が悪く、戦術機の重量を持ってしても風が強引に機体をもつていこうとする。まして、我々の装備機は吹雪だ。主機を吹かして強引な姿勢制御を続ければ、推進剤がもたん」

97式高等練習機・吹雪。

光州作戦の大損害を受けて、本来の練習用から引き上げ、実戦投入を前提とした主機換装を行ったタイプだったが。所詮、本来は一線運用する機体ではなく、パイロットの小ささはいかんともしがたい。

冬に雪を見ることがさえ稀な九州で、吹雪とか似合わないな、どうせなら改名すればいいのに、などと配備当初は将兵達の冗談のネタにされたものだが……。

「既に、北九州の防衛線は四分五裂状態であり、西部方面司令部との連絡も途絶したままだ。だが、それでも我々は戦わなければならん」

勇雄は、状況の悪さを認識しながら、網膜に戦術機からの情報を投影する機能をオンにした。

吹雪が立ち並ぶ足元では、整備兵が血相を変えて走りまわってい

た。実弾が装填された突撃砲がクレーンで吊り上げられ、長刀を積んだ大型フォークリフトが走り回っている。

あちこちで見えない火花が飛び散りそうなほど、緊張感が満ち満ちていた。実戦出撃前でしかありえない、緩みの欠片もない空気。

戦術機ハンガーの入り口付近には、土嚢が積み上げられていた。出入りの邪魔になるのだが、仕方ない。天候は、記録的暴風雨の真っ只中だ。下手をすれば、水が入ってきて電気機器が駄目になる。

「これより我が戦術機甲連隊は独自の判断により熊本駐屯地を進発、九州自動車道を北上し、撤退してくるであろう友軍及び避難民の脱路確保に当たる。尚、本行動の責任は全て」

異常な事態であった。

1998年夏、日本帝国の国防最前線・九州にBETA群が上陸。将来のBETA本土襲来を睨み、帝国政府が様々な無理を通し、莫大な予算と何十年もの時間をかけて準備していたはずのシステムが、ろくに機能していない。

北九州の友軍・民間人の状況を把握しようとした通信関係者が、聞こえてくるあまりの阿鼻叫喚にパニックを起こしたほど酷い戦況に陥っていた。

それも、上陸を受けてわずか三日で、だ。BETAはさらに四国や中国地方にまで出現しているという。これらの地域には、多数の民間人が残存したままだった。

滅茶苦茶な現実を呼んだ原因は、複雑だ。この期に及んで指揮権や監督権・主導権を奪い合うお役所の対立。軍内派閥のせめぎあい。光州事件の影響による、国連や他国との不協和音。BETAの渡洋能力を甘く見積もっていたこと。

加えて、最悪のタイミングでやってきてくれた台風。九州人にとっては、毎年の風物詩である暴風雨だが、中央の官僚達はデータ上ではともかく実感として『それ』が何か理解していなかった。

上官の訓示が一段落ついたところを見計らい、機付の整備士が通信を入れてくる。

「三川少尉！ 装備は本当にこれでいいのですね！？」

「ああ」

答えながら、勇雄は磨き上げられたパネルに映った自分の表情を確認した。やぶ睨み、ととれるほど鋭い目つきをした顔が、強張っている。

これでは駄目だ。いくら無愛想で通っているとはいえ、突撃前衛長にして先任少尉の、こんな面は部下に見せられないぞ。自分をそう叱咤すると、勇雄は部下達への通信回線を開いた。

「各機、指示通り追加装甲と長刀は装備したな？ 普段、盾や刀を使わないポジションの者は戸惑うだろうが、絶対に持っていけ。風に負けそうになったら、地面に突き立てて使うんだ」

戦術機が世代を重ね、機動性を重視するに従い廃れていく傾向にある巨大な盾。それが、この状況では命綱になると判断したのは勇雄が地元の九州出身だからだ。

機体の制御システムだけでは、絶対にこの乱暴な風に対抗できない、という確信があった。長刀もまた、帝国衛士の多くが望むような格闘戦での華麗な斬り合いに使うことはない、と見ている。

部下達 いずれも衛士訓練校を出て数ヶ月、という若い少年少女らが、ひきつった声ではい、と返事するのを確認すると。勇雄は誘導員の指示に従い、吹雪を前進させる。

足元に気をつけ、土囊を乗り越えて外に出ると、衛士強化装備の内側の肌ざわり、と総毛立つ。

分厚い装甲と管制ユニットの壁によって遮られているはずの、外

気の動きを直感で捉えたのだ。

見えざる巨人が暴れまわり、空気のできた槌を好き勝手に振り回しているような、凄まじい荒れ模様。

勇雄は口の中でつぶやいた。

相変わらず、自然は人間の事なんて考えちゃいない

大粒の雨が、散弾じみた勢いで降り注いでいるため、戦術機のカメラ性能を持ってしても視界は暗い。

勇雄は、一瞬だけ別世界に放り込まれたような錯覚に陥った。これまで、何度も戦術機で往来したルートだというのに。

頭を振って、現実を直視する。最悪に近いであろう条件下で、最低の戦場へ向い戦う……それが自分の仕事だ。

小隊を率いて、前進を始める中で、勇雄は自分がどうして衛士になったのか、をふと思い返していた

1993年の九州の夏は、ユーラシアの環境変化による地球寒冷化などど吹く風、というように暑い日が続いていた。

「鬼畜アメリカ人の血が混じった奴は、この街から出て行け！」

負の感情を丸出しにした耳障りな少年の声に、三川勇雄は足を止めた。

思わず顔を上げた勇雄の目に飛び込んでくるのはかわり映えしない、いつもの通学路。

背の低い木造家屋が、身を寄せ合うように立ち並び、風に乗ってくる匂いはどこかかび臭い。とある名家の治めていた歴史ある城下町、といえば聞こえはいいが、古臭く、保守的な住民の気質を示

すような、陰鬱な街だ。

英雄の進もうとする先で、一人の少女が五人ぐらいの少年に取り囲まれていた。いずれも、この街唯一の中学校の制服を着ている。英雄自身もまた、その学校に通う生徒だ。

ひやりとしたものが英雄の背中を走る。

アメリカ人の血、という言葉が示すとおり少女は日本人離れた容姿をしていた。

豊富とは言いがたい陽光を跳ね返し、金の雫をまとったようなブロードの髪。繊細な曲線を見せる目鼻立ち。野暮ったい制服を着込んでいても、どこか気品ある雰囲気さえ漂わせていた。

対して、少年達はどこからどうみても日本人顔揃い。いずれも、英雄には幼い頃からの馴染みの顔だった。

「あいつら……！」

英雄は思わず駆け出していた。隣のクラスに、外国人とのハーフが転校してきたというのは、狭い学校では噂になっていた。

目立つ少女が、こんな保守的な街でどう見られるのか。その程度は、英雄にも想像がついた。

少年達が、嵩にかかってはやし立てる声を上げようとする。

英雄が、少女が泣き出したりする前に間に入るべく足に力をさらにこめようとした時、少女の柔らかい唇が動いた。

「うるさい！ 外国人っていえばアメリカ人しか思い浮かばないの！？ 頭悪いわね！」

良く通る、思わず背筋を伸ばしたくなるような少女の一喝に、少年達はもちろん英雄も思わず動きを止めてしまう。

「あたしは、半分オーストリア人よ？ わかる？ オーストリアリ

ア』じゃなくてオーストリア。あんた達みたいなのでも、世界地図ぐらいはお勉強しているでしょう?」

少女の腕は腰の横に当てられており、その葡萄色の瞳に宿る光は、気弱とは対極。セミロングの金髪は、いまにも怒りに逆立ちそうだ。反対に少年達は、氣勢を削がれたように後ずさる。

「……どうしても私が気に食わないのなら、相手になってあげるわよ? さあ、最初は誰!？」

挑発するように拳を握る少女に、少年達の顔色が厳しいものになる。

ただでさえ見栄を気にする年頃の少年だから、本当に少女に手を上げるかもしれない。勇雄は、再び走り出すと大声を出した。

「お前達、何をしている!？」

少年と少女の視線が、一斉に勇雄のほうを向いた。

少女の目は厳しいままだが、少年達は明らかに怯んだ様子を見せる。

「きゅ、級長……」

少年の一人が、そう勇雄を呼んだ。いわゆる学級委員の事だが、この『時代』ではかつてとは少し違った意味を持っていた。

1979年からはじまった、BETA大戦を睨んでの日本帝国教育体制の刷新以来、年々学校教育でも軍事訓練色が濃くなっている。小学校レベルでさえ体力錬成と集団規律が優先され、中学校になると正規の軍人が来て生徒を鍛えることも珍しくない。

だから、級長はかつてのような『人気者』がつくクラス内地位で

はなく、兵士の尻を叩く下士官のヒヨコ的な意味を持つ。

勇雄は、学力体力は優秀だがあまり人に好かれる少年ではないため、同級生からは親しまれるより煙たがられていた。

「こ、この女が生意気だから、ちょっと思い知らせてやろうと……」

自分達の正当性を主張しようとする少年を、勇雄は一睨みで黙らせた。

「言い訳はいい。二度とこんな真似をするな。早く家に帰れ」

勇雄の低い声は、少年達の目に不満の火を灯させた。だが、表立って逆らう者はいない。勇雄の腕っ節の強さは、彼らにはよく知られていた事だからだ。

不満そうな舌打ちを残しつつも、少年達が退散する。それを見送ってから勇雄は、少女に向き直った。

なんと声をかけよう、と迷う勇雄の機先を制するように、

「ちょっと。何を勝手にあいつらを逃がしているのよ？」

と、少女が低く言った。

この少女の気の強さは普通じゃない、助けた甲斐がないぞ。そう勇雄は思った。

「君も、早く帰れ」

勇雄は、表情を引き締めてことさら硬い声を出した。

実の所、勇雄は外国人の血が入った人間を見るのは初めてで、戸惑いがあった。近くで見ると、少女の整った容貌は胸をどきりとさせるほどのものだ。

内心を悟られるのが嫌で、勇雄は彼女から視線をはずすと、足早に歩き出す。

背中に、彼女の唸るような声が届いたが、無視することにした。

「ただいま」

勇雄は、立て付けの悪い戸を開いて家の中へと入った。嗅ぎなれた藁の匂いが、鼻にまとわりつく。

街外れにある農家が、勇雄の家だ。

この街には、不文律がある。後世からは幕藩時代とか、封建時代と呼ばれるような時代から続く、見えない決まりだ。

お大名の家柄は、現在でも街全体に影響力を持っている。町長やら町会議員は、ほとんど世襲だ。次に、大名に仕えた武士の家が力を持っており、そういうヒエラルキーでいえば小作農である勇雄の家は底辺に近い。

勇雄がクラスで微妙な立場なのも、『たかが水呑百姓の子』なのに武家の流れを汲むクラスメートを差し置いて、級長になった事が影響していた。

「……………」

ふと、こんな街から出て行きたいという気分になることがある。

思春期の少年なら、どこに住んでいようと一度は夢想するような事だが、勇雄のそれは少しだけ切実だった。いじめを受けるというほどではないが、居心地のよくない学校の毎日があるからだ。

だが現実の問題として、勇雄の家に息子を外の街に出すような余裕はない。

BETA大戦とやらがどんどん激化していき、日本帝国中で将来

の国難に備える動きが活発化するにつれ、税金がどんどん高くなつていった。そのうち、大東亜戦争時代のような鉄製品の供出まではじまるのではないか、という噂さえある。

ただでさえ、収穫した農産物の何割かを地代として地主に納めなければならぬ家計は、火の車だ。

雑念を頭を振っておいだすと、勇雄は手にした鞆を放り出した。このまま田畑に出て、家族の農作業を手伝うのが日課だった。

「勇雄、ちょっと」

家を出ようとする勇雄を呼び止めたのは、台所から出てきた母親だった。

「悪いけど、これを鈴前さんのところへ届けてきてちょうだいね？」

最近、病気で伏せがちの母親の手にあったのは、風呂敷包みだった。今日は顔色が良さそうなので、勇雄は少しだけ安心する。

「鈴前さんのところだね」

「ご近所づきあいが濃密なこのあたりでは、作りすぎたおかずをやりとりするのは当然の慣習だった。

母から荷物を受け取った後、勇雄は足早に外へ出た。

近所、といっても農村の感覚で、だ。普通に歩いては二十分ぐらしかかる離れた位置に目的の家はある。しかも、三川家より街に近いから逆戻りすることになるのだが、勇雄は気にしなかった。

山の稜線を紅に染めて夕陽が落ちかける中、勇雄は風呂敷包みを胸に抱えるようにして走り出した。

心地よい風が、勇雄の頬をくすぐる。

故郷があまり好きではない勇雄だったが、この風はお気に入りだ

った。人間の身分とか営みとかと無関係に、思うさまに大気の中を
かけまわる存在。それに包まれていると、自分の心も一時、自由を
得たように感じる。

途中、田畑で忙しく動き回る影がいくつもあった。作ってる農作
物は、米が主流だが粟や稗などの雑穀もある。

救荒作物、と呼ばれる劣悪環境に強い食い物への注目が、世界的
な難民増大のために高まっているのだ。肥料や農薬の値上がりの影
響もあって、多くの農家が作付けを行っている。

特に多いのが、サツマイモだ。元々、このあたり 九州中部は
南部と並んで、サツマイモの栽培が盛んだったから、時代が戻った
といえるかもしれない。

「すいませーん、三川です」

鈴前家は、勇雄の家よりずっと立派な作りだ。その門前にたどり
着くと、勇雄は声を張り上げた。

「はい、今いきまーす！」

返事とともに、ぱたぱたと廊下を走る音が聞こえる。

おや、と勇雄は首を傾げた。鈴前の家は、医者である老人が一人
住んでいるだけのはず。だが、今聞こえてきたのは。

「何か御用です……げっ!？」

顔を出したのは、つい先刻に出会ったばかりの、あの金髪の少女
だった。愛想の良い笑顔で出てきた彼女の態度は、速やかに引きつ
ったもの変わった。

「お孫さん、でしたか」

勇雄は、遅れて出てきた鈴前老人によって居間に通された。あの少女は、慚然とした態度で風呂敷包みを受け取ると、姿を消していた。

「うん。勇雄坊は、美恵のことは覚えておるな？」

「はい」

卓袱台を挟んで語る老人の顔は、しわくちやだ。勇雄が生まれる前から、この近辺では貴重な医者として頼りにされてきた人物だった。

美恵、というのは老人の娘で看護師だ。海外医療救援隊とやらに参加した先で外国の人と結婚した、という話は聞いていた。が、娘がいたということは勇雄には初耳だった。

「今までは、両親と一緒にイギリスで暮らしていたんだが……あちらもどうもいけないらしくて、の」

老人の表情に、一抹の陰が差した。

BETAなる異星からの侵略者が、ユーラシア大陸で猛威を振るっていることは、報道統制をされた中でも少しずつ漏れ聞こえてくる。

日本も無関係ではいられず、数年前から大陸諸国への援軍を出していた。

おそらく娘だけでもより安全な場所に、と避難させたのだろうと勇雄は想像する。オーストリア人だ、という彼女の啖呵から考えると、二度目の疎開ということか？

「まあ、そんな訳じゃから仲良くやってくれとうれい……何しろ、あの子は目立つからの。日本語の勉強はしておっただしが……」

ため息交じりの老人の言葉に、勇雄はなんともいえない表情を作った。さっそく彼女が絡まれていた事を伝えていいのか迷ったのだが。

「お爺ちゃん、余計な事は言わないでいいから」

そこへ、制服姿のままの少女が手にお盆を持って入ってきた。そして、湯飲みを男二人の前に置く。

「日本人の男の子って、よってたかると強気なくせに、一人だと内弁慶なんでしょ？ ママがそういつていたもの、頼りにならないわ」

「これ！」

鼻を鳴らす少女に、老人は軽く咎めるが。勇雄は、不快を覚える前に感心した。

「よく内弁慶なんて言葉を知っているな。それに、日本語も上手だ」

お世辞ではなかった。彼女の日本語は、たまに妙なイントネーションがある以外は流暢だった。

だが、褒めたにもかかわらず、彼女の顔つきは厳しいままだ。

「ぶぶづけ、いる？」

「……………え？」

意味が分からずきよとんとする勇雄と少女を見比べて、老人が天井を見上げた。

「美恵は、娘をどんな風に育てたんじゃ……………」

金髪に、葡萄色の目をした少女　　鈴前ユノ（学校での通称だ。本当の戸籍の名前は別にあつた）は、たちまち狭い街の注目を集めるようになった。

ただでさえ珍しい、外国人の血が強く出たほっそりとして儂げでさえある容姿。それとは裏腹に、大勢の男子に凄まれようが遠慮なく反撃しようとする気の強さ。

明らかに浮いているのだが、本人はそれを歯牙にもかけない。

鈴前老人に頼まれたこともあって、勇雄はユノの身边に多少は気をつけていたのだが。

「きゅ、級長！　大変なの、鈴前が　　」

その日、放課後の教室に居残つて勉強していた勇雄の元に、今にも口から泡を吹きそうなほど慌てた同級生がやってきた。

勇雄は、うんざりした顔を向ける。

ユノは転入して一ヶ月、ほぼ毎日のようにトラブルを起こす。その度に勇雄に仲裁や後始末が持ち込まれる。彼女が所属するクラスにも級長がいるにもかかわらず、だ。

ユノ本人にまったく感謝されないこともあって、いい加減にうんざりしていた。

「……今度は何だ？ また喧嘩か？」

ユノは気だけではなく暴力沙汰にも強かった。自分より体格の良い男子に絡まれ、返り討ちにした事は一度や二度ではない。それがまた、周囲の反発を買っているのだが。

「そ、そうだけど、相手が悪いのよ！ なんとかして三川君！」

「そりゃ、毎回のことだろう」

英雄は適当に答えながら、鉛筆をノートに走らせる。

いつも仕掛けるのは、ユノを懲らしめてやろうとか考える馬鹿な男子だ。舐められたままでは日本人の沽券に関わる、と本気で思っている阿呆か、あるいは目立つ女子の気を嫌悪であつても引きたいと思う下心丸出しの馬鹿かはともかく。

「違う、そうじゃない！ 相手のほうに原因があるって意味じゃない！」

同級生 三冬明美は、綺麗に刈りそろえたショートカットの髪を振り乱し、血相を変えて英雄の前に回りこむ。

「一組の、『殿様』達と……」

英雄は椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。

殿様、とはその名の通り昔はこのあたり一帯を治めていた大名家に連なる子弟達のことだ。教師でさえ、腫れ物に触るように接する。子供同士の喧嘩程度でも、たとえ殿様側が悪くても相手の親が必死に謝りに行くような、そんな者達だった。

「どこだー！」

「こゝ、校舎の裏庭」

勇雄は、舌打ちを盛大にこぼしながら、机の間を縫うように駆け出した。

「……………はあ」

足元から伸びる自分の長い影を覗き込むような前かがみで、勇雄は帰路を辿っていた。

隣では、頭から湯気を立てそうなほど怒っているユノがいる。

「信じられない！ どうしてあいつら、あんなに高慢なの！？」

顔を上げた勇雄の視線が、恨めしげに彼女の横顔を撫でる。

「だから説明しているだろう。日本には武家っていう制度があって、あいつらの家は今でも力があるんだ。外国にだって、貴族はいるだろうっ？」

いつものように、相手に凄んで黙らせる事ができなかった勇雄は、殿様達とユノを分けるのに苦労した。具体的には、平謝りしつつユノの制服の袖を引っ張って逃げたのだ。

「それが何よ！？ たまたま先祖に昔の偉い人がいたってだけじゃない！ あいつら自身が何か立派な事でもしたの！？」

「……………」

勇雄だって、薄々は疑問に思っていたことだった。

だが、上下秩序への文句を口にするのは、この街ではご法度だ。子供の世界なら、陰湿な仲間はずれを受けるような。さすがに中学生にもなれば、多少は分別らしいものが発生するはずだが……日頃、ユノに絡んでいる連中と殿様達が談合でもしたら……。勇雄は、彼女を庇いきれる自信がなかった。

「とにかく、大人しくしていてくれ。毎日毎日、誰かといがみあっていたら、君だって身がもたないだろう？」

説得を試みる勇雄に、ユノが猫科の猛獣じみた目を向ける。繊細ともいえる顔立ちとの落差に、勇雄の心臓が胸の中で強く跳ねた。

「あんなこそ、毎日毎日、私につきまとわないでよ。お爺ちゃんの言っていたことなんて、気にしなくていいわ」

「……………そうもいかないだろう」

「級長だから？ お偉い家の子には、ぺこぺこするくせに？」

からかうようなユノの言葉に、勇雄はぐつと唇を噛んで肩を落とした。

彼女の言うとおりだ。自分はほとんど習性として、殿様達と他の学生への態度を使い分けている。情けない……。

しばらく二人は、無言で歩いていた。ほどなく、鈴前家が見えてくる。

「ごめん、言い過ぎたわ」

ぶつきらぼうにそう口にした彼女は、家に入って行くうとして、そのすらりとした足を止めた。

「……ねえ、サムライって今も偉いってことだけど。衛士とどっちがすごいの？」

唐突な問いに、勇雄は小首を傾げた。彼女の真剣な顔つきを見ながら、考え考え言葉を口にする。

「難しいな。衛士と侍ってというのは、別物だし」

衛士というのは、BETA大戦において投入された新兵器・戦術歩行戦闘機やそれに類似した兵器を操る者を指す。その重要性や、戦術機の見栄えの良さから報道では良くお目にかかることがあった。この時代の、少年少女の憧れの代表格とっていい。

これに対して、侍は基本的に世襲の地位だ。よく外国人が（時に、日本人自身も）勇敢な日本人をサムライ、と呼ぶが本来の意味からすると微妙。武家にして衛士、という存在もいるようだが。

「……ただ、僕は衛士のほうがすごいと思うけど」

「どつして？」

「だって、侍はいい家の子に生まれれば、それでなれるんだ。だけど、衛士は才能があつて厳しい訓練に耐えた人間じゃないと、なれない」

勇雄がうすうす感じていたが、しかし古い世襲秩序が濃い影を落

とす街では、言えない意見。それが、するりと出た。

ユノは、腕組みをすると形の良い眉を跳ね上げ、何か考え込んでいる。

二人の間を、ゆるやかな風がすり抜けた。

「決めた。私、衛士を目指すわ」

「……………え？」

「おじいちゃんや、ママみたいな医療系もいいけど。どうせ目指すのなら、夢は大きいほうがいいわね。それに、あの殿様達を見返せるし」

「ちょ……………！？」

いきなりの宣言に、勇雄は目を白黒させる。衛士になるなんて、雲を掴むような話。それに、他人を見返すために進路を決めるなんていいのか、という疑問が生まれるが。

当人は、すっかりその気になったようで拳をぐつと握り締めている。

頭痛を覚えた勇雄は、思わず天を仰いだ。

1988年より、日本帝国は将来を見据えた国家を挙げての衛士選抜・育成計画を開始していた。具体的には、教育関連の法律を改正し、若年のうちから衛士にふさわしい人材をプールしておく、というものだ。

日本は冷戦構造の西側最前線の一つとして、強大な軍備を揃えて来たが、対BETA戦の情報进行分析した結果これでも不足する、と

いう危惧を持つに至った。

戦術機増強だけではなく、海軍巨大戦艦の近代化や、戦車・高射砲といった兵装類の更新も同時に推進される。

軍事規模拡大の負担を背負うのは、重税を課せられる国民達だ。

国軍に加えて、別に斯衛軍が存在する二重軍備構造や。帝国の特殊事情を建前とした、コストの嵩む独自兵器装備体系といった無駄に目を瞑ったままで強行されたのだから、国民の暮らしは急速に苦しくなっていく。

一般教育予算は簡単に削られ、よほどのエリートコースを除いては戦争に直接貢献しないと思われる教育機関は閉鎖されることも珍しくなくなった。

反対に軍関連の学校 陸軍士官学校や海軍兵学校、各地に急ピッチで増設された衛士訓練校は、受け入れ人員を年々拡充していった。

それでも、衛士というのは狭き道だ。

衛士適性と総称される対G・対震動能力はもちろん、戦術機という複雑な兵器を理解できる知能や、過酷な軍務に耐える肉体能力が要求される。軍人として、公式に正当化される暴力を担うという基本は変わらないから、人格的にも信頼が置ける事が必要だ。

だから、勇雄はユノの宣言をほとんど不可能だ、と見ていた。実際に彼女が暇な時間を見つけて体を鍛えたり、勉強に打ち込んだりするようになっても、その考えは変わらなかった。

ただ、努力しているのを周りのちよっかいで妨害されるのは気の毒だ、とは思ったから自然と彼女の番犬のような立場になる。

そして……。

「こ、この前……ぐ、軍人が来て色々テストしてたのって……き、きつと衛士適性よ……ね？」

白い肌を真っ赤にして、歯を食いしばりながらユノが言った。

「だ、だと思っけど……か、確証はないし……な」

力みながら答える勇雄の聲が、時々つつかえては震える。

「あんた達も、毎日飽きずによくやるわね」

窓から暖かい光が流れ込み、眠気を誘う昼休みの教室。そこで、勇雄とユノはひとつの机に向かい合わせで分厚い本を読んでいた。

揃って、空気椅子状態で。

それを呆れ顔で眺めているのが、同級生の三冬明美。前にユノが殿様達と喧嘩をした時、知らせに来てくれた少女だ。

衛士を指す、と口にしてからユノは次々と独自の訓練なるものを編み出し、試していった。これはそのひとつで、頭と体を同時に鍛えるのだ、という。

最初はそれを「馬鹿だなあ……」と思いながら観察していた勇雄だが。

『見られているだけなんて、不公平！』とか『あんたにはできないでしょう？』とかの挑発を受けるうちに、いつの間にか揃って訓練するのが日課となっていた。

「二人とも、もう足ががくがくじゃない。意地を張り合っただけで、体壊しちゃっわよ？」

ユノがこの街にやってきて、はや三ヶ月が経った。相変わらず浮いている彼女だが、それでも何人か親しいと呼べる人間ができていた。

その一人が、明美だった。彼女も最初は外人然としたユノの姿に戸惑った様子だったが、いまではよくしゃべっている。

「だ、だって……く、くやしいもんっ……！」

必死になるユノの姿を見ても、勇雄は先にギブアップする気にはなれなかった。

体力は、勇雄が持っている数少ない自慢の部分だ。他の農家のように、機械化された器具を買う余裕の無い小作農の子として、小さい頃から草むしりや力仕事をこなしてきた。軍事教練化した体育の授業であっても、常にトップを維持している。

何よりわざと負けたら負けたで、敏感にそれを察知するユノが怒りだすのだ。

明美が、指先で自分のこめかみを掻くような仕草を見せる。

「衛士になんて、なれるはずがないって。この前テレビでやっていただけ、志願者が殺到して、倍率が四十倍とか五十倍になるらしいわよ？」

戦意高揚宣伝の影響や、どうせ将来は軍に入る可能性が高いなら恵まれた地位を最初から狙う、等。理由は色々だが、日本中の優秀な学生達が衛士になろうと動いている。少し前に比べれば、門戸が広くなったとはいえ、片田舎の人間がエリートになるなんて無理。それが明美の意見だった。

もつとも、『殿様』達の中でも、お大名家直系の子なら話は別だ。よほど病弱とかでも無い限り、帝都・京都にある斯衛士官学校はじめとする高等教育機関行きがほぼ確定している。それが、封建社会の色が残る帝国の現実だった。

明美の言葉にもめげず、尚、制服を汗でぬらして我慢比べする勇雄達に、同級生らがちらちらとした視線を向けてくる。中には、勇雄に対する露骨なやつかみもあった。

黙っていればユノは異国の雰囲気を漂わせた美少女だし、明美も悪くない容姿だ。両手に華、といえなくもないだろうが。勇雄から

すれば、こんな面倒な立場、代わって欲しいならいつでもどうぞ、
と思っていた。

「失礼する」

教室の入り口から、落ち着いた大人の声が上がった。生徒達が一
斉に黙り込み、そちらに視線を集中させる。

立っていたのは、三十代ぐらいのスーツ姿の男性だった。

「ちよ、町長？」

誰かが、思わずと言った調子でつぶやいた。勇雄も、驚きで腰砕
けになりそうになり、慌てて机を掴んだ。

町長は、かつてこのあたり一帯を治めていた大名（正確には、と
ある大藩の支藩だそうだが）・石動家の次期当主となる人物でもあ
り。『偉い人』という意識は子供達にも叩き込まれていた。

もつとも、町長本人は偉ぶったところのない気さくな人柄ではあ
ったが。勇雄も、時々こつそりお菓子を貰った事があった。それ
も、周りの大人が勝手に『配慮』をしてしまうのだ。

ふと勇雄は、農作業の合間に大人たちがしていた噂話を思い出す。

武家の名門である石動家のご子息は、今代は病弱な方々ばか
り。国家が戦時色を強める中、家の体面を考えるとよろしくない
ところが、ご当主が『若気のいたり』で他所で作った妾の子
が、立派な軍人に成長した。士官学校を出てから大陸派遣軍に参加
し、勇名を馳せているとか

その妾の子を、ご長男である町長を差し置いて家の次期当主
に迎える話が出はじめている

勇雄にとっては、耳を塞ぎたいような大人の醜聞。その当事者が、

いつになく厳しい表情を作って歩み寄ってきた。

「三川勇雄君、だね？」

「は、はい！」

疲労した足を、無理矢理に気合でまっすぐにして、直立不動になる勇雄。心臓が高鳴り、先ほどとは違った種類の汗がどつと出る。

「先日行われた、全校生徒対象の衛士適性テストにおいて、君の素質が類稀なものだと判明した。また、日頃の学業における成績優秀な面も鑑みて、国防省より衛士訓練校への推薦が内示された」

「……………？」

勇雄は、何を言われているのか理解がおいつかず、ぶしつけにも町長の顔を直視した。

衛士訓練校への、推薦？ 倍率が馬鹿みたいに高い難関への？ だいたい、衛士になりたがっていたのは自分ではなくてユノのほずと勇雄はぼんやりした頭で考える。

町長は、勇雄の手に分厚い書類を渡し、「親御さんにそれを見せて、受けるかどうかよく相談するように」と言った。

さらに勇雄以外にも、何人かの生徒の名が呼ばれる。

その中には、鈴前ユノの名前もあったのだが。

彼女が受けた内示は、衛士訓練校ではなく看護学校への推薦だった。

軍隊は、直接戦闘に携わる兵士だけで成り立っているのではない。その何倍もの人数の後方支援要員があつて、初めて一個の有機集団として機能する。

そして軍隊には社会のバックアップが不可欠だ。国民の支持・支援のない軍隊は、ただの孤立した暴力集団にすぎない。

だから、直接軍事に関わる部門以外でも資質がありそうな少年少女の早期選抜を、政府が大々的にやりはじめている。

そういう詳しい事情を勇雄達が知つたのは、町長の口からだつた。

「私の本音を言わせてもらえば……正直、君たちのような若人の未来を大人が一方的に決めるような事は、極力避けたい……」
だが、今は御国の、いや人類全体の危機存亡の秋であるのもまた、否定できない。……今回の推薦は、決して強制ではないから、よくよく保護者やご家族と話し合つて決めるように」

そう締めくくつた町長の表情は、硬いもの。言い回しも、中学生達にはわかりづらかつた。

が、「決して強制ではない」という言葉の裏に何があるのか。ほどなく勇雄にも理解できるようになる。

その日の放課後、どこから話を聞きつけたのか、街でも名士といわれるような人々が勇雄の家を訪れて、見たことも無いような豪華な『祝いの品』を届けて来るようになった。

これまでは、公然とではないものの勇雄の家を見下してきたような大人たちが、粗末な家に押しかけてきては郷土の誉ほまれだのと騒ぎ立てる図は異様だつた。

とても推薦を断れる雰囲気ではない。勇雄は、早速にそれを思い知らされた。

勇雄にとって意外だつたのは、大人達の馬鹿騒ぎが、過大ではあつても理由の無いことではない、ということだ。

衛士訓練校卒業生はよほど特殊な例でも無い限り、一人前と認め

られた時点で少尉に任官される。いわゆる、戦時の数合わせに召集される予備役ではなく、ばりばりの現役少尉だ。

軍の将来の幹部を育成する、士官学校並の待遇が約束されている。そこへ早期に推薦される、というのはとても名誉な事に違いはなかった。

訓練中の授業料や生活費は国が賄ってくれて、わずかだが給料さえ出る。貧家の人間でも、優秀な人材を衛士にしたいという国策の現われだった。その分、訓練内容は大変厳しいらしいが……。

「……ちよつと、外の空気を吸ってきます」

来客が一段落した後、ほとんど茫然としている両親にそう告げると、英雄は靴をつっかけ外へ出た。

こんな日に限って、大好きな風はるくに吹いてこない。既に濃い夜の色に染められた天空では、明日の晴天を告げるような綺麗な星があちこちで瞬いている。

「どっしりよっ」

つぶやきながら、気の向くままに歩き出す。

なんとなくぶらついていているうちに、前方の人影に気づいた。降り注ぐ星の光を受け、それ自体が輝いて見える金髪を持つ少女。そんな人間は、この近辺ではユノだけだ。

英雄は、息を飲む。いろいろごたごたして、彼女と話す暇はなかったが。本来、衛士になりたがっていた彼女に示されたのは別の道。よりによって、衛士になる事を示唆されたのは自分だ。

「あ……」

こっそり逃げ出そうか、という誘惑に駆られた英雄だが、行動に

移す前にユノと目が合う。

彼女が、思いつめたような表情のまま歩み寄ってくるのを、勇雄は黙って待つしかなかった

未だ、大勢の日本人にとってBETA大戦は実感の湧かない遠い世界の話で。ひたすら日常生活に追われる、幸せな時代の頃の話だった。

「っ！ 全機、停止。警戒態勢に入れ！」

連隊の先頭に立って進軍していた勇雄は、視界に映るちらちらとした赤い光に気づいて、過去に飛んでいた意識を現在に戻す。

戦術機の暗視センサーの機能を最大にして、道路の真ん中で雨合羽を被り、立っているのも難しい強風になぶられながら誘導灯を振り回している人影を確認する。

部下達の機体が突然の指示に、つんのめるように停止するのを確認してから、通信装置のスイッチを戦域向けに切り替えた。

「第113戦術機甲連隊所属・三川勇雄少尉だ」

すぐさま、豪雨の音響に負けないよう張り上げた返事が来た。

『西部憲兵隊司令部の、葦山憲兵中尉だ！ 熊本連隊か！？』

憲兵。

日本帝国の憲兵は、歴史的に評判が悪い。大東亜戦争中には軍内はもちろん帝国臣民、占領地の民衆に対して一方的な逮捕・拷問も辞さない態度で接し、果ては帝国の国会議員まで監視下に置いた。

現在はさすがにそこまで横暴ではないが、一般の軍人にとってはいろいろうるさい相手。

だが、この状況ではやっと邂逅できた友軍だ。勇雄は勢い込んで、情報を求めた。

「そつだ。上級司令部との連絡が途絶したため、連隊長独自の判断で行動している。このまま道路を北上し、防衛戦を展開する予定だ。状況は？」

『最悪だ！ こちらでも憲兵隊司令部と連絡が取れん！ …… もつすぐここには、避難民が殺到してくる。それも、数万単位でだ！ 到底、統制できん！』

勇雄の背筋に、氷の刃でも突き立てられたかのような悪寒が走った。予想できていたことだが、無秩序な民間人の波がやってくる。

『すまんが、迂回してくれ！ 幸い、こちらへのくそBETAどもの浸透はまだだ！ …… 福岡市あたりは、もう手遅れだろう……』

憲兵の言葉の最後のほうは、雨にかき消されそうなほどか細いものとなった。

話している間にも、無数のヘッドライトが近づいてくる。クラクションの音がうつすらと聞こえ始めた。民間人による、めいめい勝手な判断での避難だ。

命がけの脱出だけに、他人を押しつけてでも……という状態だろう。事故発生率など、想像する気にもなれない。

直接戦闘状態に入る前に、これか。

勇雄の腹の底で、不安と恐怖が首をもたげる。このままでは故郷を含む九州全体が、いや日本全体が砂上の楼閣のように、あっさりと灰燼に帰してしまうのではないか？

だが、まがりなりにも小隊長として部下の命と、国家国民に対して責務をもつ軍人に、一個人としての感情に囚われ、頭を抱える『警沢』は許されない。少なくとも、状況が一段落するまでは。

「了解した。連隊長に伝える」

鉄の巨人である戦術機が道を塞いでしまつては、逃げられる者も逃げられない。英雄は連隊長を呼び出すのと同時に、網膜投影画面に地図データを開いて別の北上ルートを探す。

そんな英雄の吹雪を、雨が一層激しく叩きはじめた。

中編

明るい太陽の輝きよりも、ほのかな月光の恵みのほうが、人の美しさを引き出す時がある。

生まれてはじめてそれを勇雄が実感したのは、1993年秋のことだった。

衛士訓練校への推薦話を聞かされた夜、なんとなく外に出た先でばったり会ったユノは、日頃接している時とは違った神秘的な雰囲気漂わせて歩み寄ってきた。

既に薄青色のワンピースに着替えたユノ。その肌は星や月の光を受けて、金の光をまとったように見える。人間ではなく、どこかの精霊かと錯覚しかねないほどの印象を、勇雄に与えた。うらぶれた田舎農村の光景さえ、少女の周りだけは別世界のように華やかだ。

彼女がさくさく、と土を踏みつける音が、やけに大きく響く。

「……」

ユノが息遣いさえ聞こえるような距離まで近づいてくると、勇雄は理由もなく自身の鼓動が早まるのを感じた。

不意に、正体のわからない気恥ずかしさに襲われた勇雄は、何か彼女に声をかけようと頭を働かせようとするが、それより早く、

「ごめんなさい」

と、ユノが頭を下げた。金髪が、さらりとした音を立てて流れる。

「え？」

ただでさえ思考が鈍っていた勇雄は、彼女の意外な態度に反応で

きずにいた。

「きつと、私のせいでもあるよね？ 自主訓練につき合わせたりしたから、適性とか能力が上がって……それで、偉い人の目にとまるぐらいになつて」

「……………」

「あんた、このままだと無理矢理にでも軍隊に取られちゃう。きつとそうなるつて、お爺ちゃんが言つてた。『強制じゃない』つて言つて責任逃れして、そのくせ外堀を埋めて逃げられないようにするのが、この国の悪い面だつて……………」

「それは」

英雄の脳裏に、先ほどの家での光景がよぎる。もう英雄が一人前の衛士になることが確定したかのように、当人の家族よりはしゃぐ身なりの良い大人達の、無責任な笑顔の数々。

あの『空気』に逆らえるはずがない。実質的には、強制に等しい状況がもう出来上がつている。石動町長が見せた苦悩は、こうなる事がわかつていたからだろう、とようやく察することができた。

「そ、そうなつたら……戦場に行かされて、戦わされて……………」

ユノの表情が、少しずつ曇っていく。

この時になつて、英雄はようやくユノが今回の衛士推薦に責任を感じている事に気づいた。同時に、彼女の過去を思い出す。

詳しい話を聞く機会などなかったが、ユノは数ヶ月前は欧州にいたのだ。BETAと人類の、生存権をかけた死闘が繰り広げられた大地に。今の英雄には想像もつかないような、悲しみや苦しみをひ

っそりと抱えていたのかもしれない。

衛士になりたいという希望だって、本心では見栄などとは違う動機が隠されたいたのかも

ようやく血のめぐってきた脳細胞でそこまで考えた瞬間、勇雄は思わずユノの肩に手を伸ばしていた。

「きつと……ひゃう!？」

なおも何か言い募ろうとしたユノが、驚愕を露わにした声を上げて身を硬くした。それにもかまわず、勇雄は衝動の赴くままに口を動かす。

「ユノには、感謝している」

「え……?」

「本当は、街から出て行きたかった。このままだと、生まれのせいですつと蔑まれるから。でも、家の事情とかあって、無理だって諦めていた。その道が開けたのは、ユノのお陰だ」

一気呵成に言い切る。この時すでに、勇雄の腹は決まっていた。

生まれた環境が貧しければ、当人の能力や器量がどうだろうと、ある程度一生が決まってしまう冷たさに覆われているのが人の世だ。

まして日本帝国においては、例えば政威大將軍にふさわしい器量と人格を完璧に備えた人材がいたとしても、五摂家直系に生まれなかった、というだけで政変でも起こさない限り將軍にはなれない。

そのような、有形無形の制限は国民の体を感じがらめにしていく。

が、勇雄は自分の資質が認められ、努力次第では軍人としての榮譽を得られる機会に恵まれた。その原因が、人類という種全体の

危機にある、としても。

「推薦を受けて、訓練校に行く。絶対に一人前の衛士になって戻ってくる。そうになったら、誰も僕を馬鹿にしない……それどころか、街の誇りに思ってくれる」

「え、えっと」

「いや、自分ひとりだけの事じゃない。みんなに、生まれだけが人間の全てじゃないって、思わせることが出来る。『殿様』達だつて見返せる。そうになったら、ユノが敬遠されることだつて」

途中から、自身が何を口にしていいのかわからなくなってきた勇雄の顔を、ユノの瞳が複雑に揺れる光をたたえて見つめている。

「あ、あの！ す、少し痛いんだけど……！！」

彼女がようやく発した声に、勇雄ははっとなった。気がついた時には、彼女の肩にかけた手かなりの力が籠っていた。

「い、ごめん！」

熱した炭を押し付けられたかのように頬を真っ赤にした勇雄は、飛び跳ねるように彼女との距離をとった。掌に残る、少女の体温と柔らかさを知覚した瞬間、恥ずかしさでこの場から逃げ出したくなつた。

勇雄に負けず劣らず、異国生まれの少女の肌も紅潮している。もし、ユノが何か言いたげな素振りを見せなかつたら、勇雄は本当に逃亡という選択をしたかもしれない。

「え、えーと。うん、わかった。わかった、けど……それで全部？」
なぜか身をもじつかせ、小動物のようにちらちらと勇雄を観察しはじめたユノ。葡萄色の目には、何かを期待するような輝きが生まれていた。

嗅ぎなれた故郷の空気を胸いっぱい吸い込んで落ち着きを取り戻した勇雄　まだ心臓はどくどくと鳴っているが　は、彼女が何を求めているのか、を考えた。

そして、大事な事を伝えていない、とようやく思い至る。

勇雄は、背筋を伸ばして態度を改めた。ユノも、神妙な面持ちになって動きを止めた。

「鈴前」

「は、はい！」

二人の間に、極限というにふさわしい緊張が張り詰め

「看護学校への推薦、おめでとう」

「……………はい？」

一気に弛緩した。

「そっちだって、かなりの倍率だそうじゃないか。うん、そうだな、看護師は人の命を預かり、生かす仕事だ。本当に立派な人しかつけない。衛士より凄いかも」

「……………はあ」

「見ている人は、ちゃんと見ているんだ。だから、鈴前も元気を出して……あ、もしかしてまだ衛士を目指している？ それなら、一般の試験で訓練校に行く事だって」

なんとかユノの機嫌をなおして貰おうと、懸命に言葉を考えては口にする勇雄だったが。舌を動かせば動かすほど、ユノの細い眉は厳しい角度になっていく。

不意に、ユノの体が動いた。一秒足らずで空いた距離を詰め、棒立ちの勇雄の腹に拳を叩き込んできた。喧嘩慣れした、腰の入った鋭いボディーブロー。

どすつという重い音が、夜気に響く。

「馬鹿男！」

「ぶほっ!？」

避けるどころか、腹筋を固める暇もなくいい一撃を入れられた勇雄は、その場に崩れ落ちる。

さらにユノは、勇雄の背中を靴の裏で蹴り始めた。ワンピースの裾がきわどく波打つが、彼女は全く気にしない。

「このっ！ このっ！ これだから日本人は！ イタリア人の爪の垢でも煎じて……いえ、ここまで鈍感だと、こいつ特有の病気ね！」

「ちょ……!?!? 痛い、痛いつて！ 何で急に怒りだすんだよ!?!？」

「わからない!?!？」

「わからないつて……だから蹴るな!！」

「鈍感！ それ事自体が罪よっ！ 名前で呼んでくれたのが、戻っているとか……！」

膝を土で汚しながら、悲鳴じみた声を上げる勇雄。息を乱しながら、さらに踏みつけ攻撃を敢行するユノ。

ようやく吹き始めた夜風が、騒ぐ二人の頭上を軽やかに駆け抜けていった。

中学校を卒業した三川勇雄は、衛士訓練校に入学した。

街を出発する際の見送りは、いつの時代だ思うような和服姿の大人達（多くが、例によって街の有力者だ）が来るといふ盛大なもの。皆、嘘っぽい笑顔を浮かべており、勇雄の体を心配してくれたのは、両親と鈴前老人、それにユノと明美ぐらいだ。石動町長は終始事務的で、その内心をもう周囲に悟らせることはなかった。

そうして入った衛士訓練校の生活は予想通り、いや予想以上に厳しかった。

本職の歩兵を育てるのでもこれほどでは、と思うような過酷な基礎体力練成訓練の洗礼は序の口。生身でのサバイバル能力と作戦遂行能力を、無人島をまるまるひとつ使って試される試験（総戦技演習）にクリアできなければ、戦術機のネジ一本に触れる事さえ許されない。

並行して行われる座学では、将来の少尉任官に備えて初等指揮官に必要とされる知識を、これでもかと教えられる。ただの知識丸暗記では通じず、常に想像し先を読むことを叩き込まれた。物理や軍法についての課業も、手抜きなどできないレベルの高いもの。

戦術機搭乗資格を得た後は、一騎当千の強さを目指す操縦技能に加えて、非常時に最低限の整備や修理は自力でできるよう、整備技術も仕込まれる。

全国から選び抜かれた資質ある者達からですら、脱落者が当たり前になるカリキュラムに、勇雄は強烈な意志をもって喰らいついていった。

貧家出身ゆえに、苦しい中で国民が納めた血税で自分達が養われ、鍛えられていることを、骨身に染みて知っていたからだ。

「きっと、僕の家族と同じように、手の皮をすり切らせながら草を取ったり、全身を酷使して畑を耕したりしている人達が納めた金だ。一銭たりともおろそかにはしないぞ」

いささか大袈裟かもしれないが、勇雄はそう考えた。

古い言い方をすれば、夢寐^{むび}の間にも精進を忘れず、そこにユノに言った言葉への責任感が加わり、苦痛を乗り越える力を与えてくれていた。

大陸派遣軍が膨大な犠牲とひきかえに得た戦訓がフィードバックされた質の高い訓練は、若者を優れた戦闘兵器へと完成させていく。帝国軍がBETAに対する危機感を強く持ち、かつ衛士の訓練を短縮簡略化せざるを得ないほど、追い詰められてはいない。そんな時期の衛士候補生だから、厳しさについていける者には、十分すぎるほどの教育が与えられた。

『三川勇雄候補生を、卒業相当と認む。教官会議の全会一致により、右の者を少尉に任官す』

そう宣告を受けたのは、1997年春先のこと。入学以来三年の時間をかけ、みっちりとしごかれた勇雄は、逞しい衛士に成長していた。

そして1998年夏、現在。

熊本市駐留の戦術機甲連隊に所属する勇雄は、第1大隊第1中隊B小隊の隊長として、連隊の先導という大任を担って吹雪を操る。

中尉、大尉クラスを差し置いて、各中隊突撃前衛長の中のさらに前衛、というポジションが、部隊内での評価を何よりも表していた。

網膜投影の時刻表示は、午前四時十三分を示す。九州を直撃した台風は、未だ去る気配が無い。

勇雄の口元は、厳しく引き結ばれている。従う部下達も、無言だった。四機の戦術機が立てる足音や駆動音は、本来ならけっこうな音量になるはずだが、全て雨音に吸収されていた。

戦術機本来の能力を発揮できる天候なら、航空機並みの速度で飛行して迅速に移動できるはずだったが。現在は、凄まじい雨風が行く手を阻んでいる。

主脚走行で、身をかがめるようにした移動……しかも、避難民とぶつかって混乱を引き起こすのを避けるため、ルートを頻繁に変えざるを得なかった。時には、田畑を踏み荒らすように横断することになり、出が農家である勇雄の胸を痛ませる。

慎重に前進を続けていると、友軍の通信が入ってきた。

「こちら、レイダー1。南関インターチェンジを確保、機械化歩兵隊と協同して警戒態勢に入る。軽歩兵隊及び憲兵隊は、民間人の整理誘導に当たるとの事」

レイダー1……同じ戦術機甲連隊所属の、第2大隊隊長のコールサインだ。勇雄らとは別の道から北上していたのだが、途中で運よく同じように独自判断で動いた部隊との合流に成功。

連隊長は、彼らに戦線の要となるポイントの構築を命じていた。ただ、主要自動車道が民間人の車両や徒歩移動によって塞がれはじめているので、補給車両はじめとする後方支援部隊の追従は遅れがち。

工兵隊は、氾濫した河川の堤防や、寸断された道路の修理に駆けずり回っていた。

九州全域に対して、政府から第二種退避勧告が発令されたのは、

1996年の事だ。だが、この命令を皮切りとする避難計画は、当初から『見込みが甘い』と批判されていたレベルのもの。

強権を発動してでも、九州を「軍人・軍属以外居ない土地」とすべしという意見は、大陸派遣経験者の多い博多守備隊などから、たびたび上がっていた。

帝国の苦境の原因のひとつと見られる光州事件も、直接の原因は戦闘区域に残った民間人、特に避難を拒む者達への扱いだ。

が、現実には、数百万もの民間人が国防の第一線に取り残されている。受け入れ先の選定の難しさや、国民の権利を制限し財産を接收する法的な問題が、秩序ある迅速な疎開という理想の前に立ちはだかったのだ。

皮肉なことに、権利や財産に対する配慮の度合いを、日本国民より低くして済む外国人難民の他地域への避難のほうに、はるかにスムーズにいつていた。

そして現在、南下してくるのは人間だけではない。BETA群も、姿を現すだろう。そうなれば、民間人を戦闘の巻き添えにする事になる。

いや、北九州ではその地獄は、既に展開されているものと見なければならぬだろう。

「くそっ！」

ほとんど無意識に、勇雄は罪のないレバーを必要以上の力で握り締める。

故郷の骨董品じみた街並みを思い出す。あれだけ嫌だった故郷が、こんな時に限って無性に愛しくなった。このままでは、高い確率で戦火の手はあそこにも伸びる！

皆、無事に逃げてくれ……そう祈る事しかできない。意識の隅に浮かんで消える知己の顔の中で、一際鮮やかに浮かびあがるものがあった。

ユノ。

彼女とは、街を出た後にはすっかり疎遠となっていた。やはり推薦を受けて看護学校に進んだので、忙しかろうと思つて手紙を出すのもなるべく控えたのだ。最近は何こうからの連絡も、途絶えがち。

「……………ん？」

ふと、勇雄の肌が前触れもなく粟立つた。湧き上がる個人的な思いを一瞬で凍結させるような、冷たい何かか神経を走る。

この感覚は

勇雄には、風の動きを読める事があつた。

戦術機の分厚い装甲や、衛士強化装備がまるで存在しないかのよ
うに、大気の状態を全身で感じ取れるのだ。

故郷で暗い思いを抱えていた頃の数少ない楽しみだった、自由な
風にひたる境地。あれをさらに強くしたもので、調子が良い時には、
センサーより早く風の強さや向きを察知できた。

帝国軍の衛士は、空力を利用して機体を制御する機動概念を教え
られているが、それを実機で生かせるかはやはり個人差がある。勇
雄は、この方面が異能といえるほど上手かった。

『三川少尉は、風に愛されている』

などと言われたこともある。

勇雄からすると、風は誰を愛しも憎みもしない超越的な存在だから、この賛辞はあまりうれしいという実感はなかったのだが。

ともあれ、勇雄は自分の感覚を信じていた。

北……………福岡市方面に向けて指向させていた吹雪の頭部を、西側寄りに向ける。元から暴風雨のために乱れている風が、一際奇妙に動いていると思われた方向へ。

後続する吹雪が、上官の異変に気づいて移動速度を落とした。搭

乗する部下達は、BETA日本上陸を睨み訓練時間を短縮された衛士ばかりだが、さすがにこの状況で油断をする馬鹿はいない。

数秒の後、天然の妨害をかくぐって吹雪の震動・熱源探知システムが、蠢く物体の存在をキャッチし衛士に情報を提示する。

「BETA!!」

敗走してくる友軍や民間人とBETAが団子になって福岡方面からやってくる、という想像図が当たるよりも強い衝撃を受けた。

……そういうことか！ と、勇雄は血が滲まんばかりに唇を噛んだ。

帝国軍は、BETAの大規模渡海事例があまり多くないこともあって、ほとんど無意識に対人戦のセオリーを防衛作戦に組み入れていた。

すなわち、大陸から日本を攻撃するためには、北九州に橋頭堡を築いてから次の場所へ攻めていくという想定だ。

が、異星からの侵略者どもは、そんな思い込みをあざ笑うように、直接に西側 有明海からも這い上がってきたのだ。

出撃前にわずかに知れた情報 中国・四国地方へのBETA浸透も、九州防衛線を突破した個体ではなく、いきなり海をもぐって奇襲してきた連中の仕業かもしれない。

最悪の場合、近畿や北陸などの人間側の視点でいう後方地域が、不意打ちを喰らっていた危険性さえあった！

BETAの大多数は、素直に北九州に襲来したのだろうが、少数だろうが側背への散発上陸を受けただけで、帝国軍は十分混乱する。この近辺の代表的な自治体は、大牟田市だが。恐らくそこに敵はもう……。

「クロウ02（三川勇雄のコール）より各隊へ！ 西方より襲来するBETA群を確認、規模不明！ 連絡のつく者全てに、側面警戒

を敵にするようにと！ 我が小隊は、これより阻止戦闘に入る！」

脳裏に広がる嫌な予想の数々を強引に遮断して、勇雄は警告を発した。

昼間の晴天下なら、のどかな田園地帯が広がっているはずの一带に、招かれざる侵略者達が闇をかきわけ、泥を跳ね上げて踏み込んできた。

BETA側もすでにこちらの存在を悟ったらしく、大岩のような外殻で雨を跳ね返ししながら、二十体ほどの突撃級が向かってくる。

敵先頭集団との距離は約2000メートル、数はまだ計測できない。光線照射警報は、今のところ無し。刻々と変動するデータを睨みつけながら、勇雄は通信系統を小隊向けに切り替えた。

「浅生、森村、高梨！ よく聞け！」

あえてコールではなく苗字で呼びかける勇雄。急展開に呆然としていた部下達は、はっとなったように表情を引き締める。

「出撃前の連隊長訓示のように、これだけ風が吹きまくっていると機体バランスは崩れがちだ！ FCS（火器管制システム）の未来位置予測も、砲弾が流されてあてにはならん」

浅生眞子少尉は、おかつぱ頭を震わせていちいちうなずき、森村喜一郎少尉は小声で勇雄の言葉を反芻する。高梨紗枝少尉は、形のよい唇を真っ青にしている。彼女らは、全員がやっと十七歳という若さ。

第113戦術機甲連隊は、本来の防衛計画でいえば第一線の北九州部隊の損耗をカバーする、予備兵力として機能するはずだった。いくら一部スペックは撃震を上回る性能があるとはいえ、高等練習機にすぎない吹雪を装備しているように、恵まれた部隊とは言い難

い。
人員も、小隊長・中隊長クラスはともかく、平衛士は任官半年にもならない新米や初陣者が多かった。

「よって、機体を片膝立ち姿勢にしつつ、追加装甲を地面に立て足場を固定し、砲撃は小隊……最低でもエレメントによる一斉攻撃をもつてする」

「み、三川少尉、それでは、敵の攻撃からの回避ができなくなってしまうが……！」

森村が、意味がとれなくなりかけるほど震える声で疑問を呈した。上官の発言が終わらないうちに口を挟むのは、本来なら禁止だが、今はそんな初歩さえ意識から飛んでいるのだろう。

「この状況では、下手な回避運動は自滅行為だ。BETAもとの距離が詰まる前に、余裕をもって位置を変える。移動指示は、絶対に聞き漏らさず迅速に従え！」

「は、はい！」

「それと、許可を得ないで質問をした罰だ」

ことさら鋭い表情を作る勇雄に、森村は反射的に背筋を伸ばす。

「帰還した後、浅生と高梨のどっちを恋人にするか、はっきりさせる事を命じる！」

「！　しょ、少尉！？」

声を上げたのは、高梨だった。青白かった頬が、一気に血の気を回復する。ことさら勇雄はそれを無視し、

「知らないと思っていたのか、森村！ 聞けば、貴様と浅生・高梨は幼馴染同士で、しかもどちらも貴様を好いているというではないか！？」

と、さらになじった。

「そ、それは……」

狼狽し、意味もなく手をばたつかせはじめた森村。女性少尉二人は、羞恥に耐えかねたように俯いている。

「貴様のような奴をなんというか知っているか！？」

「いいえ、知りません！」

「男の敵だ、この野郎！ 貴様のせいで、どれだけの寂しい男性将兵が心に傷を負ったと思っている！？」

元気者の浅生と、おっとりタイプの高梨。いずれも、なかなか美人の資質が見えて、数年後を楽しみにしている野郎どもが多いのは、事実だ。勇雄には、特に興味が無い話だが。

「ち、ちがいます三川少尉！ 眞子……浅生少尉はともかく、私は私は……」

何かを思い切ったように、きつと顔を上げる高梨少尉だが、その声は尻すぼみとなった。

普段は無愛想で、恋愛話どころか冗談とは無縁な勇雄のいきなりの『口』撃に、部下達は混乱し　わずかな間だが、身に迫る危険を忘れていた。

よし、と内心で勇雄は胸を撫で下ろす。軽口を叩いているほうは、実は楽しくはない。緊張しすぎている者に対して、薬物投与や重暗示催眠を避けるために、仕方なく頭を絞ったのだ。

『部下達の気を紛らわせるには、男性が多いなら下ネタか食い気話、女性が多いなら恋話が良い』というあやふやな小隊長間の通説に頼ったものだが、どうやら上手くいった様子だ。

森村達がいますこし冷静なら、勇雄の顔から慣れない冗談を叩く者特有の、こっけいな強張りを見取ることができたはず。

安心と同時に、罪悪感も湧き起こってくる。この雛鳥のような部下達を、死地に追いやるのだ。今から、己の責任と指揮の元で。これが、部下を預かる者の辛さだった。

「おしゃべりはここまで！　横隊を組み、砲撃準備に入れ！」

語調と表情、そして何より気持ちを引き締め直しながら、勇雄はレバーを握った腕を動かした。森村達も、一斉に衛士らしい緊張感を回復させた。

本来なら、各人の好みや戦術傾向に合わせて多様化する小隊各機の装備は、今回は右腕の突撃砲、左腕の盾、背部兵器担架には長刀及び予備突撃砲で統一してある。

かがみ込む吹雪の右膝が、水分をたっぷりと含んだ土にめり込んだ。追加装甲の下部は、元々ドーザーブレードとしての機能が期待されているから、こちらも深々と大地に抉り込む。

部下達の吹雪が、ややもたつきながら自機と同じ体勢を取るのを確認しつつ、勇雄は広域画面で友軍の動きをチェックした。

勇雄の警告は通じたようで、各隊の動きは活発になり、一部はこちらに向かってきている。戦闘の閃光などにより、福岡県寄りの部

隊にも、気づいてもらえるかもしれない。

「まず120ミリ砲弾で、先頭の突撃級を撃破する。弾種は、AP FSDS（装弾筒付翼安定徹甲弾）。小隊データリンク照準」

指示する英雄の全身に、かっとな熱いアドレナリンが駆け巡りはじめる。一方で、頭の芯は冷え切っていく。

網膜投影画面中央部の照準表示に、密集する突撃級の姿をはつきりと捉えた。FCSがはじき出した諸元と、自分の直感を素早く組み合わせた英雄は、トリガーを迷わずに引いた。

「撃てっ！」

突撃砲が、低く重い咆哮を上げる。砲弾が、雨と風の厚い幕を切り裂いて飛ぶ。吹雪の濡れそぼった装甲が、発射炎の照り返しを受けて一瞬だけ輝く。

無風時に比べてやや複雑な弾道を描いた120ミリ砲弾は、時速100キロ近くで接近する突撃級の装甲殻を正面から叩き割る。BETAの体液が、汚い花を咲かせた。

一瞬遅れて、三機の吹雪も隊長に従って砲撃を開始した。突撃級の的が大きかったこともあり、外した弾は無い。

暗視モードの網膜投影画面の向こう側で、都合四体のBETAが強制停止し、あるいはつんのめって転倒した。

「や、やった！」

快哉を上げたのは浅生だ。恐怖の具現であるBETAを、自分の攻撃で撃破した。弱気を打ち払う、一番手っ取り早い光景に目を輝かせている。

先頭の突撃級が、がっくりと勢いを落とした所に、後続の同種が

突っ込んで玉突き事故を起こす。BETAは同士討ちをしない性質を持つが、慣性には逆らえない。

「もう一射するぞ！ 照準をちょい上げる！ 弾種は同じだ」

人類を悩ませる雨だが、悪い事ばかりではない。自然の水冷却装置となり、120ミリ砲撃用ユニットの加熱を抑えてくれるから頻繁な連射が可能だ。

渋滞を起こした突撃級の群れの中に、再び四条の軌跡を描く砲弾が叩き込まれる。爆発で飛ばされたBETAの装甲殻が、仲間を傷つけ、さらに被害を拡大させた。

「よし、移動するぞ。誘導マーカーを出すから見落とすな、ついて来い！」

勢いを失い、泥濘と化した田畑でもがく突撃級の脅威度はかなり落ちた。敵しいのは、後続してくる要撃級や戦車級の相手だ。砲撃命中率を多少でも安定させるため、大地にへばりつかなければならない現状では、接近格闘戦は死と同義。

盾がへたばつたら、長刀を支え棒代わりにするつもりだ。生まれ育ちから、侍の象徴といえる刀に特別な思い入れはない（むしろ、微妙な違和感さえ覚えている）勇雄でも、武器を本来以外の用途に使わねばならない予想は、快いものではなかったが。今は援護が駆けつけてくれるまで戦い、生き残るのが最優先だ。

勇雄機を中心に、四機の吹雪はささやかな防衛線を張る。戦意高揚映画にあるような、華麗に天地を縦横無尽に跳ね回る無敵の巨人の姿とは、程遠い。泥水の中を這いずり回り、及び腰と取れるような発砲と退避を繰り返す。

落ち着け、落ち着け。

英雄は、四肢を巧みにつかつて吹雪を操作しながら、自分に言い聞かせる。目前に迫るBETAへの恐れはあるが、それは大したものではない。別の戦い方をしたいという誘惑が、そつと意識を撫でるのだ。

自分なら、このBETAに味方しているかのような台風の中でも、もつと自在に動ける。巧みにBETAを狩れる。

今の三川英雄は、古いしきたりに絡め取られている少年ではない。人類の、もつとも野蛮かつ暴力的な面を体現し得る、精鋭衛士なのだ。

これが、中隊あるいは大隊規模の整然とした戦闘なら、遠慮なく思う様に動いたかもしれない。部隊や個人の気質による程度の差こそあれ、突撃前衛長に必要とされるのは、隊の切っ先となること。空元気であつても過信と紙一重になるほどに己の技量を信じ、真っ先に呐喊して敵陣を崩し、勝利へと続く道筋を開くのが仕事だからだ。

だが、今は来援がいつ来るかも不明な孤立戦闘。敵の増援だつて、どこからどれぐらい現れるかわからない。英雄は、ともしれば理性の鎖を引きちぎりかける自分の中の熱を抑えながら、敵と部下達へ注意を払う。

「10（浅生）、11（森村）は十一時の方向から来る戦車級を攻撃しろ！ 風で弾が流されていることを忘れるな！ 12（高梨）、残り弾数チェック！」

「りよ、了解！ 11、弾幕を張るから合わせて！」

「……くられ、くられ！」

浅生と森村機が、昆虫じみた六本足を忙しく動かして迫ってくる赤

黒いBETAに、36ミリ砲弾をフルオートで放つ。火網に捕まった戦車級は、無数の破片となって千切れ飛んだ。BETAの流した体液は、すぐさま雨に洗い流され泥水と見分けがつかなくなる。

「120ミリ砲弾は残り2発、36ミリは……え!? の、残り100発を切りました、よ、予備弾倉を」

「!? 不用意にリロードに入るな!」

経験が少ない事に加えて、天候の影響で落ちた命中率を補うために砲弾を節約する余裕のなかった高梨は、残弾数に気づき焦りに陥っていた。

そこへ、十分に取っていたはずの距離を詰めて要撃級が急接近する。勇雄が制止した時には、既に高梨の吹雪は弾倉交換シークエンスに入っている。主腕が動きを止め、副腕が予備弾倉を腰部ラックから取り出している最中だ。

勇雄達の吹雪は、主機関連こそ実戦機相当に交換したもののだが、駆動系その他は『不慣れな衛士候補生が、下手な動作をしても事故発生率を抑えやすい』練習機らしいアンダーパワーのままだ。複雑な動作は、遅い。

「きゃ、きゃああああ!？」

高梨の悲鳴が、通信ラインに満ちた。彼女は回避しようとしてレバーやペダルを滅茶苦茶に動かすが、現在のOSは規定行動を途中でキャンセルしてくれるほど『賢い』作りになっていない。致命的な隙を晒した。

「っ!」

カバーしようとする勇雄の前にも、要撃級が肌から無数の水滴を飛び散らせつつ立ちはだかる。人面を悪意をもって真似たような感覚器が、『行かせるものか』と言っているように思えた。

「舐めるな！」

この瞬間、勇雄はそれまで抑えてきた『熱』を解き放った。バランサーや支え的に使っていた追加装甲を、迫る要撃級に投げつけるように排除。同時に、噴射跳躍をかけた。

浮き上がった吹雪の機体に、風の拳が四方八方から轟音を巻いて襲いかかる。

戦術機、特に第二世代以降のものは、人型構造の不安定さを逆手にとりバランスを悪くすることで、破格の機動性を獲得した。機敏な行動が不要な間は、高度なアビオニクスによって積極制御することにより、転倒や墜落を防いでいる。

部下達に言ったように、この状況で風雨に支えもなく身を晒すのは機能の限界を超えた、自滅行動だ。まして、機体各部の馬力が弱い吹雪では。

勇雄の機体は無様にきりもみ落下し、BETA達の餌食となり終わる。

普通なら、そうなるはずだった。

（風は、誰の味方でも敵でもない。ただ、それにどう乗るかだ）

少年時代からもつ確信を抱きながら、勇雄は直感に全てを委ねてフットペダルを蹴りこみ、レバーをわずかに動かす。

視界の端で、閃光が走った。投げ捨てた追加装甲に取り付けられた反応装甲が爆発、寄ってきた要撃級の足を止めたのだ。

（風を読む事だけは、誰にも負けない）

瞬間的に拡大した勇雄の知覚は、後方から吹きつけて来る一筋の強風を捉えた。そのルートに、機体を乗せる。吹雪は、見えない空気の掌に突き飛ばされ、ある方向へ加速する。

前面から襲いくる、骨の芯まで歪ませるような強烈なGに耐えながら、勇雄は瞬く間に、高梨機を攻撃しようとする要撃級の頭上に達した。

そのまま、突撃砲を発砲。いくら風が強いといっても、彼我の距離が二十メートルを切っていれば、36ミリ砲弾は軌道が流される前に目標に突っ込む。

「くっ!!!」

勇雄機は、勢いをつけすぎたまま着地した。自ら跳ね上げた泥を、猛烈に被る。足が、膝まで軟弱地と化した地にめり込んだ。

しまった、という思いが恐怖を伴って勇雄の神経を駆け巡る。いま少し、地面の状態は良いと思っていたのだが、こちらへの予想は完全に外れだった。

「あ……た、隊長!?!」

死神の鎌が首から外れた、と気づいた高梨が、機体を倒れ込む要撃級から離しながら、狼狽の声を出す。

「この馬鹿がつ! 貴様も帰ったら懲罰だ! いいから距離をもつととれ、まだ敵は山ほどこいるぞ!」

彼女の声を消しとばすように、勇雄は吼えた。

暴風を逆手にとった、我ながら奇跡としか言いようが無い機動の代償に、乗機の足は完全に止まってしまった。それを見逃してくれ

るほど、人類の天敵は甘くは無い。

英雄の網膜に、敵性反応の接近を伝える赤いアラート表示が連続して映る。天を覆う分厚い雨雲のせいで、未だ深夜並みに暗い周囲から、戦車級が湧き出してきた。

「12！ 02を支援するんだ！ 他の奴は、僕が食い止めるからっ！」

森村少尉が健気にも、隊形が崩れてできた隙を補うべく、機体を前進させた。が、気合に技量が追いつかず、すぐにバランスを崩しかける。それでも意地のように、貴重な推進剤を吹かして体勢を立て直すと、にじり寄る要撃級の群れに向かって猛射を浴びせかけた。

「だ、駄目っ！ か、風が強すぎて、複雑で……わ、私じゃ隊長を誤射しちゃっ……」

だが、高梨は戦車級へ砲口を向けたものの、乱れる照準に翻弄されて手をつかねている。

「貴様ら、余計な事をするな、考えるな！ 三機一組に陣形を組み直し、後退しろ！」

這い寄ってくる戦車級に向けて、突撃砲の残弾をばら撒きながら英雄は叫んだ。もがけばもがくほど深みにはまる、底なし沼じみた泥濘。ここから脱出するには、かなり慎重な操作が必要だ。跳躍装置の噴射口に泥が詰まった可能性があるため、強引な脱出も厳しい。この条件下で正解の行動は、英雄を見捨てることだ。

目の端で戦域画面を確認すると、味方を示す光点が確実にこちちへ接近してきている。彼らとの合流を目指すべきだった。

「嫌です！ 今、隊長を見捨てたら、私達だって終わりです！ 紗枝、砲撃が駄目ならナイフを使うか、盾でぶん殴るのよ、急いで！」

反発を露わにした操縦者を乗せて、浅生機までが近接機動戦闘を開始しようとする。

英雄は、部下達の思いをうれしく思うより先に、喉元を突き上げる恐怖感に襲われた。

出撃時から注意があったように、推進剤容量が小さい吹雪で主機出力に頼った機体制御をすれば、すぐガス欠になる。そうなれば、逃亡さえ絶望的。その前に、風に弄ばれて本来の能力や技量さえ発揮できない若年衛士は、やられてしまう可能性も高い。

「
」

お世辞にも、面倒見が良い隊長ではなかった。故郷で感じていた劣等感を、未だどこか心にへばりつかせている、人好きしない先任だった。なのに……。

英雄は、生まれてはじめてといていい、狂おしい思いに駆られてフットペダルを踏み込んだ。部下達を死なせたくない、その一心だ。

が、吹雪は泥に足を掴まれた状態から脱出できない。機体の筋力といえるアクチュレーターのパワーは、衛士がいくら喚いても上がらない。それが、現実だった。

「くっくっくっ！？」

森村の唸りが、通信機を振るわせる。二本足の戦術機よりよほど安定性の良い、多足の要撃級が彼の機体の前で、大きく腕を振り上げていた。それが降ろされた時、英雄は部下を永遠に失うことになるだろう。

気が乱れた隙を突くように、勇雄の吹雪にも戦車級がピラニアじみた動きで飛びかかってきた。咄嗟に差し上げた右腕のナイフシーケンスに、喰いつかれる。ぐつと勇雄の喉が、種類の違う恐怖心の手で一斉に締め上げられる。

衰える気配を見せない雨の中、一際大きな水しぶきが上がった。

熊本中央病院のナースセンターの窓を、ビー玉大の雨粒が激しく叩く。今にもガラスを割って、風雨が進入してきそうな天気。

それを眺めやりながら、鈴前ユノは大きいため息をついた。身じろぎする度、座った椅子がぎしぎしと鳴る。

荒れた天候とそれに伴う全職員召集、台風の被害を受けた救急患者への対応、BETA日本上陸の緊急放送。ここ数時間起きた事象のうち、快いものはひとつもなかった。

ようやく一息ついたユノは、ぼんやりと昔の記憶を思い出す。

あれは、日本に疎開して間もない頃だ。学校で集める給食費を徴収した袋を、ユノが係の子から何気なく頼まれて一時的に預かったのだが、袋を返した時、

「金が減っている！ 全員分、集めたのに！」

と、言われたのだ。沈み行く夕陽の色がやけに赤かった、放課後の教室での出来事。

「知らない！ 私は中身になんか触ってないわよ！？」

すぐに彼女を取り囲みはじめるクラスメート達に訴えた声は、冷たい視線と態度によって跳ね返された。

本当に心当たりなどなく、必死でその事を伝えても、誰一人ユノを信じてくれない。蔑み、疑惑、軽蔑　　極悪人に向けるような目で見られ続けた。

「これだから、外人の女は」とか、「日本から出て行けよ」とこれ見よがしなつぶやきを投げつけられた。

生来強気なユノだが、すぐに足元がぐらつくほど追い詰められていた。涙なんかみせない、こいつらになんか負けないという意地で歯を食いしばったが、涙腺がついに主を裏切ろうとした時

「……おい、何をやっている!」

声変わりしたばかりの、低い声が教室に低く響いた。

小走りにやってきたのは、隣のクラスの級長である三川勇雄だった。教室の入り口では、ふとした拍子にちょっとだけ普通に話せた相手……確か、三冬明美という名の子が、心配そうにこちらを見ていた。

クラスメート達は、勇雄に向けてユノが金を盗んだんだ、と説明した。まるで勇雄までが共犯者のように、詰問調で。

ちがう、私は盗んでなんかいないの。

訴えたかったが、助けてもらったお礼も言わない酷い「外人混じり」の言うことなど、きつとこの少年も信じないだろう。

ユノは消え去りたい気持ちに、心を押し潰されそうになった。だが。

「本当に、最初から全員分が袋の中にあっただのか？　うちの組でも、出しそびれたり、親から金を預かるのを忘れてりするものが、いつも何人も出るんだが」

むっつり顔の勇雄少年は、周囲の雰囲気流される様子もなく、冷静に指摘した。その言葉に、何人か……特に激しくユノを非難していた少年少女達に動揺が走る。

「もう一度、確かめてくれないか？」

係に向けた勇雄の言葉は、大人のように落ち着いている。一方的に自分を庇ってくれたわけではないが、不思議とその声はユノを安心させた。

……結局、係が全員分を集めた、と勘違いしていたことが判明した。未提出者が、何人もいたのだ。

いや、もしかしたら最初から、『異物』であるくせに生意気なユノをいじめるため、意図的にやっていたのかもしれない。勇雄はその可能性を察したのか、クラスメート達に鋭い双眸を向けて、

「もしわざとなら、二度とやるな」

と、断固とした意志をうかがわせる言葉を放った。クラスメート達は、見えない掌で頭を抑えられたかのように、一斉にうつむく。

この瞬間、ユノの胸の中であらゆる不快感や悲しみを一瞬で吹っ飛ばすほどの甘い疼きが生まれた。心臓が、胸郭の中でダンスを踊りはじめる。

が、その勇雄は、ユノの内心に気づくことは当然なく、それぞれるか礼を言う暇も与えず、さっさと自分のクラスに帰っていった。まったく。いかにも義務感で仕事をしました、という態度だった。

三冬明美と、何か会話を交わしながらというのがユノの気分を一瞬で冷ませる。

「……所詮は、あの子やお爺ちゃんに頼まれたからなのね」

ユノは、それこそ級友達に対するもの以上の苛立ちを、勇雄に覚えた。

だが、そう思ってもかまってももらえるのがうれしくて、この後、あえて避けられる馬鹿な同級生との衝突も回避しなかった。ため息をつきながらも、勇雄は常に助けてくれた。

そんな中でユノを怒らせたのは、これだけ立派な勇雄が、お侍の家柄だという相手には、別人のように卑屈になる点だ。

あんな連中より、ずっと勇雄のほうがかっこよくて優秀なんだから、もつと堂々としなさいよ　そう直接言うことは、ユノにはできなかつた。

口にしたら、恥ずかしさの海で溺死してしまう！

元々、衛士になってユーラシアを取り返す戦いに参加したい、という思いを秘めていたユノが、わざわざ衛士志望であることを「周囲を見返すため」と摩り替えて勇雄に言ったのは、彼にも奮起して欲しかったからだ。

まさに、少女の浅知恵だった。

「結局、あいつだけが衛士になっちゃったのよねえ……」

ピンクを基調とした看護師の制服に、成長した肢体を包んだユノは、雨音に紛れるほどの小さな呟きを漏らした。

異国の血が美しく開花した女性看護師が憂いを帯びた表情を浮かべる姿は、天才画家が描いたように絵になっており、周りの職員……特に年頃の男性陣がしばしば熱い視線を送っているのだが、彼女自身は気がつかない。

ユノは、いろいろ悩んだ末に衛士志望を断念し、看護師の道を選んだ事を後悔していない。むしろ天職のように感じている。

優れた成績で看護学校を出たユノは、国連法規に則った国際看護師の資格（医師の手伝いの立場に過ぎない旧来の看護師に対して、自己の判断で一部の高度医療も行える専門職的な地位として遇され

る。当然、難易度も高い。BETA大戦の影響による世界的医師不足への対策として設置）を取り、数年で病院から頼りにされる存在になった。

もう、外国人とのハーフだからと蔑まれることはない。それどころか、尊敬の目を向けられる。命を救う現場に必要なのは、くだらない差別感情ではなく、技術と心がけだ。

代わりに、勇雄との連絡はすっかり途絶えがちになっていた。お互い、特に小隊長になったという勇雄の側が忙しい、というのが最大の理由だが、これではいけないとユノは思っている。

勇雄の駐屯地まで訪ねようと思案したことも、一度や二度ではなかった。何しろ、相手は鈍感この上ない性格なのだから。

「三川君は、本当に純情鈍感よねえ……女ったらしよりはずっとマシでしょうけど、貴女も大変ね？」

と、からかってくれたのは熊本県職員になった和美だ。ちなみに彼女は、勇雄に特別な感情を持っておらず、職場で知り合った二つ上の同僚と婚約している。

だが、熊本の病院にも朝鮮半島で負傷した兵士達が頻繁に運び込まれるようになると、ユノの側にもわずかな暇さえなくなっていた。

間接的ながら感じる戦場の気配に、ユノは甘い個人の感情に浸っている時期じゃない、と思いきらされる。

和美も今頃は、台風被害への対処と、未だ残っている住民の避難誘導で大わらわだろう。

幸い、ユノの祖父はじめとする故郷の街の主だった人々は、石動町長が私財（石動家の家産）を出してでも避難先での生活を保障するから、と言ってくれたお陰で速めに疎開しているが。他の町村では、居残っている人々も多い。

「でも、やっぱり……ね……」

今、こうしている間にも、英雄は死線をくぐっているのかもしれない。押しかけ女房　日本ではそう言う存在になってしまえばよかった、と切実に悩んでしまう。

複雑なユノの思惟を破ったのは、鳴り響いた内線からのコールだった。

「はい、ナースセンター」

刹那の瞬間に意識を職業人のものに切り替えたユノは、受話器を取った。

「こちら、救急医療部！　北九州からの患者を乗せた救急車両群が約一時間後に到着する！　……軍民間わず、凄い数の負傷者や病人がいる、確認できただけで、重症者が三百人以上！」

普段は聞きなれた医師の声が、絶叫に近いほど上ずっていた。

来るべきものが、ついにきた。ここも『戦場』になる。

氷を飲み込んだような寒気を感じながら、ユノは「わかりました」と短く返答し、機材と医薬品を準備するために立ち上がった。

人々は知る由もない。日本を襲った災厄との戦いは、まだ序章さえすぎていなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4295x/>

Muv_Luv 本土防衛戦～九州の風

2011年11月12日01時55分発行